

警告フザー

宮尾美明

連休明けというのに疲れている。最近ずっと疲れている。耀子は起きたときからもつぐったりしている自分に気がついた。床から濡れ雑巾のように重い体を、

「よっこいしょ！」

かけ声をあげて起きあがった。時間は、いつものように朝の五時。朝ご飯の準備をしなくてはいけない。あんなに暑かった夏もやっと過ぎ去って、布団が居心地良くなったというのに、その上、寒くなったというのに、起きる時間は永遠に変わりそうにない。いや待てよ、後数年したら、耕市も耀子も一年違いで定年を向える。その時には、死ぬくらい眠ってやろつと、今から思っている。

顔を洗ってタオルで拭いた。耀子は何気なく見たタオルに、薄く血が付いているのに気がついた。

「いやだ！朝から鼻血なんて！

そう思って顔を上げた。目の前の鏡を見て、ぎょつとした。何と鼻ではなく右目から出血しているのである。慌てて、もう一度見た。右目は真っ赤で何も見えない。慌てて左目をつむってみた。見えた！ああ良かった、と、ほつとした。しかし、何とも言えず不安が押し寄せてくる。体中がたがたで、年のせいと年のせいと思っていたが、目だけは、自信があった。五十過ぎの今までメガネと言えば、サングラスくらいで全くかけたことはなかった。ばかりか、

「最近、目が老眼で…」

同じ世代の友や、もっと若い友がそう言つと、「何ともないわ」

なんて唯一自慢できる目である。その目からの出血。耀子は慌てた。更に目を近づけて、せめて表面の血だけでもとろつと、ガーゼを中に入れたり、目をぱちぱちさせてみたが、効果は全くなかった。

「うわあ！何、その目！」

いきなり後ろから娘の薫の声がした。

「医者に行かなきゃいかんかしら？」

「あたりまえじゃない。診察券出してきてやるうか。」

ちよつと待って。耀子は慌てて今日の時間割を見る。午前中授業がびっしり。午後もある。

「あかんわ。授業あいてないもん。」

耀子が言うつと、

「そんな場合じゃないでしょう！見えなくなったらどうすんの！」

「でも、迷惑かけれんもん。」

「いつも言ってるじゃない。他の先生は、平気で休んでるって。何で自分が病気の時にでも休まんの？」

「そんなこと言っても。」

耀子はためらう。授業はどの先生もいっぱいゆとりがない。迷惑をかけられないと思つた。

「良いわ。少し早く切り上げて夕方行くから。」

「大丈夫なの？いつもそうなんだから。無理してるから、体に来るのよ。」

薫は、鼻歌を歌いながら、二階に上がっていった。

連休前に、

「年末に、東京のエデパートで展覧会をやりますが、先生は会場に御出席して貰えますか？」

耀子は数年前、その年の洋画の最高賞を受賞した。以来自分でも恥ずかしいと思っているのだが、プロ画家になってしまった。全く予定しなかった人生の悪戯であった。それを言えば、子育てが終わってから教師になったのも、一風人と変わった人生をたどっているのかもしれない。以来、泣き言も言わず、社会の片隅で細々と絵を描きながら、教師を続けてきた。全てに細々が好きだった。

四畳半の片隅にイーゼルを立て、たたみに座っての絵描きに、東京から取材に来た記者が、写真を撮れず、外で撮っていった例がある。耀子は、ほんの小さな片隅が一カ所あれば何でも出来ると思っていた。それに何より、好きな絵をこっそりと人に知られず描いていたかった。

「今年は三年生ですし、体調も良くないし、それに何より自分みたいな者が…誰か他に…」

迷惑かけますし……」

「迷惑はお互い様だよ。とりあえず作品二、三十点ばかりを」

うわああああー喉から悲鳴が出そうであった。もう死ぬうつつー出来るはずはなかった。中学三年の冬休みというのは全くないのと同じ。書いても書いても終わらない調査書と推薦書書き、それに様々な書類と目の回るような日々が待っている。絵は、一枚描くのいくら急いでも……と考えて見ると今すぐに取りかかっても出来そうにない時間ではないか。とにかく、一枚でも多く描こうと思った。三日間の連休の予定は全てキャンセルして耀子は、キャンバスに向かった。三日間、食事風呂以外は絵を描いていた。描いても描いても焦るときには、良い絵は出来ない。悪戦苦闘の末に耀子が悟った事は、出来ないと言うことであった。それでも、真面目だけが取り柄の耀子は、朝も夜も時間があればキャンバスに向かった。その結果がこれなんかもしれないと目を見つめた。いや、目だけではないかもしれないも思った。体中の血が噴き出しているのかもしれないも思った。それなのに、耀子は、ぼろ雑巾のような体を引きずって車に乗った。

「本当に行くの学校？医者は？」

薫が呆れたように見送りに出てきた。

「うん、夜、医者に行くから。」

痛みも何もなかった。時々ミラーで覗き込む自分の目が不気味な光を帯びて自分を見つめていた。右目だけだから良いか、なんて思っていた。

朝は早いから車が渋滞することは殆どなかった。すすすすと進んでいく。時々頭がぼおつとして目が霞むようであった。朝からこんなではたまらんなあ、そう思いながら進んでいく。今日は爽やかな秋晴れで何の心配もなかった。目の奇妙な違和感さえなかったらどうと言うこともない日なんだろうが。いやいや、やっぱり体のどこかと言うことはないが重い、分かった。肩に鉄板がどっしりと乗っているような重みなのである。ああ、肩が凝ってる。マッサージに行かなきゃと思う。テストが近いので、毎日コンピュターに向かっているせいだろうかと思う。ミラーを覗くと、やっぱり不気味な目が映っていた。何だか重い。体全体が重くてシートに沈んでいきそうであった。

「最近、疲れているみたいだよ、ちょっと休まなきゃ。」

薫ばかりではない、夫の耕市も口には出さないが心配そうに見ているときがある。こいつ

大丈夫か?と言う目である。

今日マッサージュに行こう、耀子はそう思った。学校に着いたら早速予約を入れておこう。何せ、何だか最近、予約がなかなか取れない。昼過ぎに電話を入れると決まって「だめだなあごめんさい」と来る。今日は何としても取っておかなくちゃ。この鉄板みたいな肩と、田んぼの泥がびっしり付いた靴を履いてるような重い足はきつとなおらないだろう、そう思ったからである。それにしても疲れている。頭が痛い。腹も昨日から下痢が治らない。真夜中に痛み始めて、途中から下痢が始まって朝まで五回トイレに走る。殆ど眠れないのと同じだから、まあ仕方ないか。ああ、疲れたなあ。やっぱり薫が言っていたように何が何でも医者に行けばよかったかなあ。絵出来るかなあ。今日幾ら早くたって、九時過ぎにしか家には帰れない。その後、御飯食べて、風呂入ってすぐ初めて、一時くらいまで描いて、でも、夜描くと、嫌なんだなあ。シンナーの匂いもろに吸ってしまったもんなあ。でも仕方ないか。とにかく一枚でも描かないと、おまけに雑誌の注文もあったなあ。もうしらんでえ。とにかく今日は目が少々変でも描くしか無いなあ。ああ、今日の学校、問題が起きなかったらいいけどなあ、子供はかわいいけど…。なんやかんやあるでなあ。そんなことを考えながら校門に入る。と、

「先生、早く来て下さい。」

誰かが職員室から呼んでいる。慌てて職員室にはいると、

「先生のクラスの早川悟君ですが、今、交通事故に遭ったって連絡があって、すぐ行って下さい。ええと場所は…」

荷物を置くのもそこそこに、慌てて走っていく。人が集まっている。とその人垣の中から一人中学生が走ってきた。

「先生！」

早川である。

「大丈夫か？」

早川は一瞬奇妙な顔をしたが、耀子の手を引っ張って人混みの中に連れていく。

「木村、自転車でこけて足挫いて歩けんのや。」

何のことはない。交通事故は自転車が倒れてひっくり返って足を挫いた、と言うことだった。しかも早川ではなく、隣のクラスの木村だった。

学校に戻ると授業が始まっていた。慌てて教室に行く。

「先生、目どうしたん？」

同僚の先生は、何も言わない。みんな忙しいので人のことなんかかまっていられない。あれっ目っ？と言う表情が素早く流れていくような慌ただしさである。声を掛けてくれるのは生徒の方である。

「ぷっつんや・」

「だいじょうぶなん。医者に行かなきゃ。」うん、学校の授業終わってからな。」

一時間目が終わると、

「先生気分が悪い。」

放課には、いつも必ず誰かがやってくる。

「熱計って。朝ご飯食べた？昨日どうしてた？」

次の授業を用意しながら、いろいろと聞く。きっちり三分、熱がある。

「どうする？お家誰がいる？良かったいるのね。連絡取ってみるね。」

洋一を帰る準備をさせるのと、次の授業に行くのと両方やりながら急いで行く。

次の授業が終わると、いつもトラブルを抱えている敬子が職員室で待っている。

「先生話がある。」

「どうしたん？またお母さんと喧嘩？」

敬子はすぐに泣き始めた。人に見られないように職員室の横の部屋に連れていく。

敬子は堰を切ったように昨日からのいきさつを話し始める。敬子と母親の確執は、毎度のことである。

「あなたの気持ちも分かるけど、先生はお母さんの気持ちも分かる。」

生徒は、抱えていたものが吐き出せると、自然に胸のつかえがとれるものである。

「落ち着いた？教室に戻る？」

今日は、敬子は素直にうんと頷いて教室に戻っていった。

「先生、目、大丈夫？」

行くときに敬子は、心配そうに覗き込んだ。

「大丈夫。どうって事ないわ。」

耀子はいつもそう言う。教師が、弱音をはくくらいなら教師をやめればいいと思っている机に向かって、ノートを点検していると、校内電話が鳴った。あああと思う。またもめことだ。

「三年生の先生、三人が来たそうです。」

机に向かつていた三年生の先生、その時間あいていた耀子たち三人が席を立つ。三人といっただけで学校中の誰もが知っていた。彼等は、自由な時間に来て教室に入らない。校内や運動場をふらふらしている。一通り、教室や校舎を回ってさがす。どこにもいない。そんなとき耀子は一人で運動場のトイレに行く。彼等はよくここにいる。トイレの後ろの草原に三人仲良く座っている。話し声もしない。後ろから近づいたので彼等は気がつかない。燦々と当たる秋の日差しを浴びて教室にも入らず、校庭の隅のトイレの横にしゃがみながら彼等は何を考えているのだろうか。しばらくじっと見てみると、たまらなく悲しくなってきた。ちよこんと並んだ違反の頭髮が、ゆるゆる風になびいて、一層孤独感が感じられた。

「またあ、来た。」

耀子の気配を感じて一人が言う。

言いたいことは山のようにあったが一言も口にしない。耀子はただ黙って横に座った。

「気持ちいいね。眠くなってくるね。」

「だろっ、授業なんかつまらん、あんなもの出たくない。」

「ここにいてもつまらんことない？」

「別に。」

彼等はいつも無口である。怒るときだけ激しい言葉が飛び交うが、その言葉はいつも短く決まった言葉しか出てこない。

うざくない？死んでこい！来るな！

目下の所、それらが一番頻繁に出る言葉である。

「先生、目どっしたん？血でてるよ。」

「きつたん？」

「年だもんな。無理しとるでだわ。」

三人は揃って、目を覗き込む。彼等の心は、もしかしたら羽毛のように柔らかいのではないかと思うときがたまにある。

「あっ！うざい、いこうぜ」

二人の先生がやってきたら、彼等は素早く三方に別れて逃げていった。逃げ方まで耀子には悲しく見えた。

3時間目の終わりのチャイムが鳴る。職員室には、ちゃんと誰かが来ている。今度は、いつもひとりぼっちの和夫。良い子なのにみんなから疎まれる。和夫のくどい少し意味の分からない言葉にも耳を傾ける。

「先生！僕、詩を描いた、見て」

和夫はなかなか良い詩を書く。

「すごいね。詩人だね。でも今はもうすぐ次の授業が始まるから、後で読むね。さあ、授業授業。」

やっと、和夫も教室に向かった。空き時間なんて全くない。授業は授業で、目が回るし、空き時間は、それ以上にクラスの生徒の面倒で目が回る。おまけに三人は、逃げ回って、空いている先生達を手こずらせている。学校と言つところは一旦回り始めたら止まらない機関車の車輪のようなものだ、と耀子は溜息をつきながら思った。四時間目が終わって、トイレに行く。じっと目を覗き込むと、血は止まっているらしいが、白目が全くなく真っ赤つか。気味が悪い目には変わりがなかった。何だか気のせいか醜くもなっている。

四時間目が終わると給食である。

「いただきます」

の後に一斉にものを口に入れたときである。しんと教室が静まる。そしてまたすぐにざわざわと楽しい話し声が続く。

「昨日さあ。親と喧嘩してさあ。」

清子が横に来て言う。清子はいつもいそいそと耀子の横で御飯を食べる。女の子の悪（わる）のナンバーワン。一年生の時から耀子が受け持っている。トラブルマシンでもめ事の原因を作っていた。

「また！お母さん可哀相だが。」

「うちの方が可哀相だが。」

「何が原因。」

「それがさあ、昨日帰らんかったの。」

途端に耀子は食べ物がつかえた。

「なにしとつたん？」

「ぶらぶらあそんどつたの。」

「誰と？」

ふふふふと。清子は笑う。

「彼氏か？」

「まあ、そんなところかな。」

「はあ、大丈夫か？生理いつや？」

「はあ、なにいつとんの。今だわ。」

「ならいいけど。」

「嫌だなあ先生、大丈夫だって。」

「何が大丈夫なもんや、危なくて仕方ないわ。」

清子の彼氏は、社会人である。耀子は、内心配で仕方ない。清子と話しているといつも給食の時間が非常に短い。話しながら、気になる子に目を配る。一人一人を見ながら耳は清子の話を聞く。

「これっ、そこなにしてるの？」

牛乳を一气飲みしてる。

「一气飲みするな、危ないんだぞ。」

「大丈夫だって、先生も入る？」

どっと笑い声は飛び交う。

「こらっ！なにすんのや。」

隣の子のお椀に残り物を入れるやつがいる。大体いつも何食べているのか分からない。ただ、あるものを口に流し込むだけである。

給食が終わると掃除。耀子の見回りは、三年生の二階全体の教室の見回りである。殆どの生徒はそれなりに一生懸命頑張っているが中には、回っていったときだけきちんとやる生徒もいる。が、まあそれは片目をつむって見てればいいが、大体掃除の時とその後の放課に暴れてけがをする子がいる。目が離せない。おまけに給食時間から、ふらついている三人は、どうやら学校を抜け出してコンビニに行ったらしい。そちらの方も目が離せず探しに行かなくてはならない。耀子は、図書当番なので、昼放課には図書室で本の貸し借りの様子を見なくてはいけない。図書室から帰るとすぐに五時間目が始まる。五時間目が終わると、

「突き指した。」

大きいからだで半べそをかきながら亭がやってくる。治療を終えると、次の授業の用意を

する。六時間目、それが終わると、すぐに部活が始まる。五時間目くらいから、耀子はひどく体がふわふわしてきた。昨日から食欲はなかったのに、清子と話してるうちにそんなことを忘れて飲んでしまった牛乳が災いしたのだろうか、せっかく収まっていた下痢が再び始まって、授業中にもかかわらず、何度かトイレに走らなければならなかった。ばかりか痛くて痛くて、立っておれなくなってきた。

「ちよっとプリントを持って来るから。」

そう言ってトイレに駆け込んだ。

「ここまで黒板写して。」

そう言って椅子に座った。

「先生、えらいの?」

前の席の生徒が心配そうに言う。

「少し、疲れているの。大丈夫よ。」

心配そうに見ている。

「ちよっと、参考の本持ってくる。」

再びトイレに駆け込む。痛くて苦しくて吐きそうだった。吐けば楽になるのに、出てきそうて出てこないという一番最悪な状態が続いた。それでも、何とか六時間目のチャイムが鳴るまで我慢した。

部活の連絡黒板に

「なし」

そう書いて職員室に痛みをこらえて入ると、「年休」

の冊子をさがした。休んだことがないので、どこにあるかわからなかった。

「何さがしてるの?」

校長が声を掛ける。

「年休のやつ。」

「珍しい。いつ?」

「今日。」

「どうしたん?」

「腹が痛いから病院に行く。」

「そりゃあ急いで。で、部活の方は?」

「休みにした。」

「目どうしたん？」

「あつ行くのは目だったんだ。腹も痛いし、二つ行けるかな？」

それでは、失礼と出ようとしたとき、

「先生、電話です。」

おいおいいい加減にしてくれよ。せっかく出ようとしたのに。

「もしもし」

声は、部活の田村香奈恵の母親だった。がくつときた。長くなることは決まっている。

「すみません、今から出ますので。」

途中まで聞いて、話の腰をおろす。また、夜電話かけ直しますのでそう言ってやっとの思いで車を出す。

年休を一時ももらったので、眼科に着いたのが、四時。どうせ人なんかおらんだらうと思っていたら、

「なんでであー」

びつくるするくらいの人であふれている。診察券を出すときに聞いた。

「待ち時間はどれくらいですか？」

「一時間ほどでしょう」

「ちよつと出ても良いですか？三十分ほどですが。」

「それはかまいませんが、呼んだとき見えなかつたら、後になりますよ。」

一時間も待っていられるか。早速近くのスーパーに行く。途中、またしても腹が痛くなってきた。スーパーに着くやいなや、買い物よりトイレに駆け込んで用を足す。もう、形なんてありはしない。トイレの蛇口から出てくる水もどきの便が、流れるだけである。出しても出しても腹の痛みはすっきりとは収まらない。でも、そんなことにもたもたしてられない。連休中は、絵ばっかり描いていたし、その後はずっと親を呼び出したり家庭訪問が続いたり、スーパーの開店時間に間に合わず、買い物もできなかった。だから何が何でも耀子は今日こそ買い物をしてはいけないと思っていた。まずは野菜売場で大根、キャベツ、玉ネギ、ゴボウ、大量に買い込む。その次お肉売場は素通り。年を重ねることに耀子は肉を敬遠したくなる。その上、狂牛病が発生して一層お肉には縁がなくなってしまう。その分、魚はしっかり買い込む。

「サカナサカナサカナア魚をたべれば」

例の歌が流れてくると、自然に魚を手当たり次第にかごに放りこむ。いか、マグロ、ひもの、切り身みんな大好きである。後、おでんの材料も買い込んで、パンの類もかごに放り込むとレジに向かった。一番好きなアイスクリームは、溶けるので諦めた。まだこれから二つ医者にかかなくてはならないから無理だろう思ったからである。時計を見ると、三十分が経っていた。出口で、くじ売場があった。

「もう頼るところはロトシックスだな」

同僚の青木の声が聞こえてくる。

「いくら当たったら仕事辞める？」

と言つのが時々話題になる。それくらい辛い仕事なのだ。楽しみも山のようにあるが、耐えられないことも山のようにある。ロトシックスは、誰でも見るちよつとした夢だろうと思う。耀子もちらつと見る。思い切つてカードを抜き出すと、思い付いた番号をマークする。耀子は、結構、予知能力があると思つている。くじは当たつたことはないが、何かにつけてなんとなく自分には予知能力があるなあと思うときがあるので、頭をひねりながら書いていくと、いかにも当たりそうな気がする。そうするとなんて考えていると、結構心が豊かになつて、馬鹿みたいと思ひながら嬉しくなる。で、それを買つと耀子は外に出た。後二十分、十分時間はある。ところが外に出たときに頭がくらくらして、何だかすつと気が遠のいていくようだった。しかし、それはいきなり耀子の顔に射してきた夕陽のせいだった。大きな荷物を抱えて、耀子は駐車場に向かった。と、はたと気がついた。自分の車が分からないのである。確かにここに置いたはずなのにと思つところには、車はなかった。そんな馬鹿な、と思ひながら耀子は近くをさがした。しかし、どこにも彼女の車はみつからなかった。耀子はパニックに陥りそうだった。盗まれたか？瞬間そう思った、いやいや、自分で自分の車を置いた場所がはつきりしないのだ。ええっ！と思つた。どこだっけ？どこにおいたっけ？幾ら考えても分からなかった。ここは昨日置いたんだっけ。一昨日は？いやいや最近来てないんだ。では自分は今日は、どこに置いたっけ？隅から隅まで眺めてみたが自分の車はなかった。時間はもう捜し初めて十分を過ぎていた。十分も自分の車を捜しているなんて。医者の自分の時間までもう十分しかない。その時、はたと気がついた。そうだ！今日は反対側の駐車場に停めたんだわ。嫌だ損ちゃつた。少し怖かつたが、耀子は慌てて反対側の駐車場に向かつていった。そこに自分の車があるのを確か

めると、耀子はほっと胸をなで下ろした
「良かった」

それにしてもあの自分の惚けぶりは一体どうしたことだろうと、耀子は急に怖くなってきた。

急いで眼科に変えつけると、

「畑田耀子さん。」

運の良いことに、丁度番が回ってきたところだった。少し息を切らして病室に入っていく。
「どうしました?」

この眼科は女医さんである。耀子は女医さんだとなぜだかほっと出来る。男の先生はどれも苦手である。

「はい、じゃあ検査しましょうね。」

言い方も優しい、その上、自分よりずっと年上で、地味であると言ったことが耀子を限りなくほっとさせてくれた。何でも言えそうな気がする。優しいちょっとシャイなその先生は、一生懸命にいろいろな検査を全部終えると、

「心配ないでしょう。目の血管が切れたんですが、前の方だったから大丈夫です。これが目の奥の方の血管だったら、失明します。」失明!恐ろしい。

「心配ないんですか?」

「大丈夫ですよ。この薬をさして下さい。良くなりますよ。血もとれていきますから。ほっとした。眼科を出ると、五時半過ぎになっていた。次いで、近くの内科に出掛けた。

この内科は評判がいいので、いつも満員。五時という夕方の早い時間なのに、もう車を置くところが全くない。とにかく診察券を出して様子をうかがうと、遙か後方順番のようなので、

「何時間くらいかかりますか?ちょっと用事がありますので出たいんですが。」

「いろいろ聞きますので、外に出られていては困ります。問診がありますので。」

と言うことで結局二時間も待たされることになった。その間問診は、ごくささいなことばかり。それでも、何回もトイレに行く時間があったので、病院にいたのは都合良かった。

「畑田耀子さん」

やっと呼ばれて入っていく。

「どうされました?」

「下痢と吐き気が止まらなくて。痛みもあります。」

「いつからですか?」

「昨日の朝からです。水みたいな下痢です。「熱は・」

「ありません。」

それではと言うことで見てもらう。

「ここは痛いですか?」

「いいえ。」

「こつちは?」

「いいえ。」

「はい、いいです。」

「食中毒ですね。」

「食中毒?」

思い出した。イクラを嫌と言うほど食べた。スーパーでぷりぷりのイクラを見つけた。あまりの美しさに思わず吸い寄せられてしまった。最近、イクラは粒が小さく、色もなんとなくドス黒い。それなのに何という美しさ。何という大きさ、何という輝き。もう見ているだけでイクラが耀子には宝石のように思えてきた。おまけにそれを口に入れてぷちんははじく場面まで浮かんできた。値段が少々高かろうとも、買いたいと思った。一生懸命働き、朝は七時から夜は九時まででんてこ舞いに働き、家の仕事もやってのけ、注文の絵に追われ、何の楽しみがないじゃないか。せめてイクラをたらふく食べてもばちは当たるまい。そう思っ買って買った。家に帰ると、いつも早く寝る家族はもう休んでいる。一人お勝手に入り、夕飯を作り始める。

イクライクライクラたべると、歌まで浮かんできそうだった。温かい御飯にたっぷりといくらを入れてお醤油をかける。それだけで喉がごくんとなる。特上のイクラくらいおいしいものがあるだろうか。いつか北海道で食べたイクラの味そのものでありながら、その時の粒の二倍あるそれを、

ーしあわせー

思いながら、耀子は一杯を食べ、もういっぱい食べる。残して明日では悪くなるかもしれない、耕市に食べさせてやりたいけど、もし悪くなっているはいけないからと、全部お椀に入れて熱い御飯と一緒に食べてしまった。腹の方はもういいといっているのに、卑しい

口の方が、もっとももっと、と言っていたのだろう。

「イクラですね。さっきおっしゃったようにイクラは 菌があるんですよ。その菌をやっつける抗生物質と、腹痛と下痢の薬を出しておきます。抗生物質は飲みきって下さい。

その他の薬は、下痢が治ったら辞めて下さい。」

その後、医者はこちらいった、

「ちょっと別の検査をしたいんですが、お金がかかります。ちょっと見てみましょう。」

そういうと、耀子の座っているそばの機械に電源を入れた。エコーの機械であった。

「すぐ済みますから、ちょっと見てみましょう。」

耀子がいいとも悪いとも言わないうちに、医者は、さっさと機械を耀子の喉に当てた。

「ほら、いっぱいできものが出来ています。多分良性だとは思いますが精密検査をやらないと分かりません。」

ドキンとした。癌、がんときた。

「で、予約を取ってですね。別の日にやっていただくわけですが。お金がいります。どうされます。」

腹痛で来て、何でエコー検査をやるのかは分からなかったが、医者が言うのだからお願いすることにした。

薬をもらって外に出ると、まんまるい月が煌々と照っていた。空気が澄んでいるからだろうが、月の黄色はまばゆいばかりで、耀子はぼんやりと見つめていた。耀子は月が好きである。いつも絵の中にちゃんと月が入っている。

「ばあちゃんの絵には月と窓がある。」

孫のなつこが言った。言われて初めて気がついた。

「本当だあ。」

今日のような綺麗な月は珍しかった。黄色の色が特別はつきりしているのである。耀子は朧月も好きだが、くつきりとした大きな月も好きだった。いつまでも眺めていると寒くなってきた。秋も終わりだった。もうすぐ初冬の寒さがやってくる。あんなに暑かった夏だつて必ず去っていく。人間の命だつてきつといつかは消えていくのだ。それでも月は永遠に過去未来の何と多くの人の心を動かしていくんだらう。そう思うと妙にセンチになつた。さつき、医者に言われたことが残っていたのかもしれない。そう言えばここしばらくどうも体の具合が妙だった。

医者が終わると八時近かった。どうせみんなもう自分の部屋に入っているだろうなあ。いっただって一人だもんなあ。

やはりそうだった。誰もお勝手にはいなかった。一人でお粥さんを作って梅干しで食べ、薬を飲んだ。もう出る物がなくなっていたので、お腹はぺこんとへこんでいた。

「やったあ！」

耀子は、最近腹が出てきたのを気にしていた。一日二日下痢をしてすっかり肉のなくなった腹を歓迎したいような気持ちだった。ぼそぼそと一人食事をして部屋にはいると、おおおおおー絶叫したくなった。何と何と描きかけの絵が、まるで部屋半分を占領して早く描かんかとわめいているようだった。しまった。絵を描かなくちゃいけない。東京の展覧会が二つ待っていた。一つは作品だけで良いが、もう一つは会場に出席しなくてはいけない。そのために描く数は、不可能と言うしかない枚数だった。体中の血が上り詰めた。

「病院なんか行っていたから時間がなくなってしまった。」

ぞつとした。今夜中に何とか目途をつけないと、大変なことになってしまう。下痢も目も吹っ飛んでしまった。書きかけのものに出来そうな絵に向かった。なかなか思うような色は出来ない。自分が考えていたようにははかどらない。描いても描いても顔が気に入らない。何度も何度も描いてはつぶし、描いてはつぶし、

「今夜はだめだ！」

絶望感がこみあげてきた。年末の二十日、と言うことは後、何日だ。その間に学校の進路の仕事が山のようにやってきて、家での仕事が山のような。その時間をのぞいて絵を描く時間なんてあるのだろうか。やっぱり、今描かなくちゃどうしようもない、寝るなんて甘いこと言っていられない。あ、そうそう明日の予定が残っていた。学校のプリントを作り始める。テストも近づいてきたので問題も考える、その間に描きかけの絵も見る、教科書の予定も見ておく、絵も見る。ああもつため。どっちからやろう。まず、学校の仕事だ。耀子はしばらく集中してコンピューターに向かった。何とか見通しがついて時計を見ると、十時を過ぎている。二時間近くやっていただけになる。

「あああー」

少し伸びをして、もう一度、絵にかかる。顔がどうしても気に入らない。顔が決まらないと絵は出来ない。もう一度消す。もう一度、もう一度、ああ今日はやっぱりだめだ。体からかいていこう。体の方は失敗はない、そちらが完成しても顔が決まらないやっぱりだ

めである。顔、かお、顔、顔。人物画は顔で決まる。卑しい心を持っていると卑しい顔になってしまう。欲を持って描くとやっぱりそうだし、今のようにならわれないと追われていららとしていと表情が険しくなる。ましてや焦りに焦っていると、画面の人物がまるであざ笑つかのようなふてぶてしい、見るだけで不快感を表すような顔になってしまう。いくら他の部分に雰囲気があっても、まるで意味をなくしてしまう。耀子の人物画は、そこはかかない。悲しみが全面に漂うという感じあるのだが、それがどうも人の気を惹きつけるらしい。でも、そう描こうとすると一層遠のいて、思いも寄らない表情になってしまう。不思議なことに顔の輪郭一つ、目尻一つ、口の端の上がる下がるのちょっとした微妙な線一つで、顔の表情はまるで別人のようになってしまう。だから、同じ絵の注文が来ると、もう吐き気を催すくらい気が滅入ってしまう。同じ絵なんて出来ないのだ。満足するものが出来ない。焦れば焦るほど、どうしようもなく追いつめられていく。悪戦苦闘して、何とか一枚ものになりそうなのが出来た。

やれやれ、後二十数枚

愕然とした。こんな調子でやっていって果たして出来るのだろうか。時計を見ると、いつか日にちが変わっていた。ぼおとした頭で、明日学校があることに気がついた。そうそう風呂に入らなきゃ。

耀子は、すっかり時間を忘れていた。いつもそうだった。絵を描き始めると時間の感覚はまるでなかった。いつも描いて描いて手が上がらなくまで描き、初めて気がつくのである。のろのろと風呂に行く。もうすっかりさめてしまっていた。温水器のお湯を思い切り強く注ぎ込む。すぐにお湯は熱くなる。

お湯にうつすら汚れが浮かんでいる。いつも最後になってしまうので仕方ない。年寄りには良いのかもしれないと思いつつながら浸かる。ふうつと思わず溜息が漏れる。ふうつとふうつとふうつととしてくる。最近御飯の途中で寝ていることが多い。御飯まで何とか持つても食後眠らないことは全くなかった。昔、といってもそんなに昔ではないかもしれないが、夫の耕市が、夕飯の酒を飲むので仕方ないだろうけれど、いつも御飯の最中からか、うつらうつら始める。それを見るとゲツと思う。恥ずかしい、御飯の途中で寝るなよなあ。そう思った。死んでもあんなになりたくないとも思った。でも、今自分が同じように夕飯の後、ずっと睡魔に襲われて眠り込んでしまうのは結局の所、疲れていることに気がついた。耕市の疲れも気がつかず、自分が働くようになって分かった。働かなかつたら、死ぬ

まで気がつかなかっただろうと思う。一步外に出ると、悲しいくらいいろんな事があり、女はぎゃあぎゃあ文句を並べていればいいが。男はそれをじっと我慢する。ああ、男は大変なんだ。初めて気がついたことだった。

年をとって気がつくことは山のようにある。そう言えば、最近忙しいので墓参りも行っていない。お墓の前でゆっくり墓の中の母親や父親と話が出来たら心が落ち着くのに、耀子はこの前に行ったときのことを思い出した。この前は夏休みだった。夏休みと言っても、お盆以外教師に休みなんて全くない。毎日学校である。主に部活であるが、部活以外にだつて、学校祭が九月にあるので、すでに休み中から練習に入る。それに、お盆の休みには、東京のSデパートでの展覧会があり、先生出席と言うことで出掛けた。と言うことはその前に気が狂うほどの時間を費やして絵の制作に入る。お盆の休みには、耀子を除いた家族全員が遊びに行ったのに、耀子一人東京の有名デパートの会場に立って、作り笑いを浮かべながら緊張のあまり体重を五キロ以上減らして、夜も眠れぬ心配で胃がきりきりの日々を送った。もう二度と嫌だとも思う。それなのに断れないのは、やがて自分にもやってくる定年退職後のことをいじましくも考えるからである。その頃になったら、もう売れなくてお払い箱で放り出されるかもしれないのに、根が馬鹿正直なあまり、せつせつせと仕事に励んでしまう。まあ、簡単に言えば、学校も絵も耀子はたまらなく好きである。だから、出来ないことでも、はいはいと言ってサービスよろしく引き受ける。ハアハアと息が切れて、ぶっ倒れそうなのに、生徒の顔を見ると、にこにこしてしまふし、キャンバスを見るとうきうきとしてお客さんを見ると、自分では全く見知らぬ優しい表情を浮かべてしまふ。

で、ついにそんなこんなで、やっと墓参りが出来たのは、夏休みが終わるという最後の土曜日であった。

「ああ、お墓に行ってお母さんと話したいなあ。」

耀

子は、母親が大好きだった。母親さえこの世にいれば怖い者は何もなかった。だけれど、人間はいつかは死んでしまうものだから、母親も七十才を過ぎて、それでも少し早いがあつてなく逝ってしまった。母親が死ぬ前の頃よりも、若かった頃の母を、耀子はいつも心に描いていた。困ったときはちゃんと答えてくれた。母親が亡くなってからはいつも母親が四六時中心の中にいるようだった。最近、特に母親を身近に感じられるようだった。

「母ちゃん」

真夜中のお風呂の中で小さく呼んでみた。家族はとくに夢の中だし、誰にも聞かれるはずはなかったから安心できた。目をつむって一番大好きな母の顔を思い浮かべてみた。お茶目な母親は、ついでに言うならば父親も十分お茶目であったが、二人はよく服を交換してはしゃいで耀子と兄を笑わせた。

「ボーン」

時計の音にはっとした。一時だ。もう明日なんだ。今日も一日疲れるなあ、考えるだけで嫌になってきた。その時何気なく耀子は自分の太股を見た。ぎよっとした。太股から足先までその殆どに何とまるで蚊に刺されたようにぶつぶつが出来ているではないか。初め水の泡かと思って手でそっと押してみた。が、そのぶつぶつは一向にとれることもなく、しつかりと足についており、そのために足の醜さは例えようもなくぞっとするくらい気味が悪いものだった。まるで白いひきがえるのぶつぶつのようなものだった。なぜ？怖くなつた。果たして足だけだろうか。自慢の真っ白い胸にまでそのぶつぶつは、登りはじめていた。うあつわああああ！思わず声に出しそうになった。しかし、やっとの事で思いとどまった。家中静まり返っており、この声でみんなが起きたら大変と思ったからである。もう一度手でこすってみる。あらあら不思議。足の表面に添って白い粟粒が登っていく。見る見るすべすべのお肌に戻っていた。なあんだ。やっぱり泡だったんだ。ぶつぶつが出来るはずなんかないんだ。遠くに鏡が見えた。顔が写っている。誰の顔だ？あの奇妙な顔は、またしても耀子は叫び声をあげた。まさしくさっきのぶつぶつが紛れもなく顔に這い登って行くのが見えた。

「やめてよ！まだ、足の方がいいわ。」

その願いも空しく、見る見る顔にぶつぶつがびっしり出来てきた。唯一救いは、真っ白なぶつぶつなので、今にもとれそうなことであった。お願い、さっきの足みたいにするつととれて。顔をそおつとこすってみた。しかし、何とすっかりと顔に張り付いてとれそうになかったおまけに、とれたと思っていた足の方にも腹にもまたいつの間にかびっしりとぶつぶつがはい上がってきていた。

「おれっ！」

もう叫び声を気にしているにしている暇はなかった。ありったけの声を張り上げた。しかし、今度は何とその声が出ないのである。必死で出したはずなのに声にならないのである。パニック。まさにパニック状態になってしまった。一体自分はどうなってしまったんだろ

う。無理に無理を重ねてきつとからだがおかしくなったんだろう。もっと言うなら、頭までおかしくなったのかもしれない。大きな不安におしつぶされそうだった。しかし、今はそんなことはかまっていられない。ひたすら体中にばらまかれたつぶつぶを取ろうとした。とれないくらいなら死んだ方がましだった。もう風呂になんか入っておられない。急いで風呂から上がって、ナイフかカッターでぶつぶつを削り取ろう。そのために死んだってかまうもんか。こんな状態でいるくらいなら死んだほうがましだった。耀子は思いつきり勢い良く風呂から上がった。するとどうだろう、水が体を流れていくのと平行してぶつぶつまでが綺麗に流されていった。

「良かった」

耀子は嬉しくて涙が出そうだった。こわごわ覗き込んだ洗面台の鏡にも、そのままの耀子の顔が写っていた。ほんのり赤く染まった頬は、いつもより魅力的にすら感じられた。

「なんだ、見間違いだっただ。良かった。本当に良かった。」

胸をなで下ろした。

ボンボン、部屋にはいると、丁度一時であった。寝間着に着替えて、ほっとして、はっとした。何かが変わる。何か動いている。

「うっわあああああ！」

今度は世にも恐ろしい叫び声が出た。耀子の目の前にある、やつとものになりそうな絵の、何とか気に入った人物画の表情が崩れているのである。単に崩れているだけではなかった。崩れた顔から、無数の虫がぞろぞろと這いだしてくるのである。数え切れない虫の行列が絵の人物の顔を崩し、キャンバスを伝いイーゼルをはって、たたみに届いているのであるその先端は、耀子の足先まで来ようとしていた。今度こそ耀子は叫び声をあげながら、部屋から飛び出た。と、何と部屋の外にもいるではないか。あっちからもこっちからもぞろぞろ虫は這いだして登って下って耀子を取り巻く全ての方向から耀子に迫ってきていた。

「助けてえええー」

絶叫しながら、耀子は外に逃げ出した。外から見る家は何も変わりがなかった。いつもの家で、いつもの静寂を保っていた。と、突然耀子は、巨大なエスカレーターの前に立っていた。そのエスカレーターは何と下りしかなかった。十台も並んだエスカレーターは全て下りで、その先がまるで見えなかった。奈落の底まで続いているような長い長いエスカレ

ーターであった。後ろを振り返ると、同じくらい長いエスカレーターが、遙か想像もできないくらい先の先が見えない遠くから下りてきていた。耀子は巨大な下りのエスカレーターの丁度中間点にいた。人々は、ただ黙って巨大な下りのエスカレーターでやってきて耀子のところで一息ついて、また次の巨大なエスカレーターで下っていった。

いやだああー

耀子のいる場所にだけ光が当たって、上も下もやがて先は漆黒の闇であった。一人二人下っていったエスカレーターも、気がつくつと、人は、誰もいなくなった。今や耀子一人が、その場にたった一人で立っていた。

その頃から耀子は気がついた。そうなんだ。これは夢なんだ、なあんだ夢に違いない。覚めれば元に戻るんだ。早く覚めよう、何とか目をさませよう、必死で目を開けようとした。声を出そうとした。しかし、巨大なエスカレーターが、後ろからも前から迫ってきて、恐ろしい恐怖ばかりが襲って目をさませることが出来なかった。

夢なんだよね。

これは怖い夢なんだよね

夢なら覚めてよね

耀子は必死で叫んでいた。早く早く早く朝が来て、目をさましていつもと変わらない朝を迎えたい。もうこんな怖い夢は見たくない。さあさあ目を覚ませ。起きるんだ。目を開けて、うつうつと目を開けて、さあ。明日になれば、暖かい太陽が顔を出し、花の香りが辺りを包み、むくむくと新芽は顔を出し、人々の賑やかな声が出て、描きかけの絵はきつと完成するだろう。家族、そうそう夫の耕市と一緒に紅葉を見に行きたい。薫と流行の服を買いに行きたい。孫達には、デイズニールランドに連れて行きたい。早く覚めてよ！早く。大体いつから夢を見ていたんだろうか？初めからかな？いやいや、学校の中からだろうか？絵を描いているときからだろうか。御飯食べてうつらうつらしたときからだろうか、いやいやお風呂の中でいつものように寝てしまったんだろうか、もう分からない。そうそう目がぶち切れたんだ。あの時からおかしかったんかもしれない。あんまり仕事やるから体が怒って血しぶきをあげて警告ブザーを鳴らしていたのに、無視して走る続けた結果なんかもしれない。ああ、反省しています。もう二度と無茶はしません。だからせめて、今年の紅葉くらいゆっくりと見させて下さい。そう言えば三十数年間、私も耕市も働きつめ。朝から晩までそれだけでもえらいのに、賞を取っていい気になって、むちゃくちゃな注文ま

で引き受けて、いい気になっていた。学校では、深夜まで悪（わる）の生徒達と、自分ならわかってられる、なんてうぬぼれていた。滅茶苦茶やってるからこんな事になるのだ。自業自得。はいはい、分かりました。もう決して無理はしません、自分の体を十分いたわります。耀子は、夢の中と言うことが分かっているも誰に言うともなく、誰に向かっていると、言うこともなくただひたすらペコペコと頭を下げている。もう一度朝を拜ませて下さい。

小鳥の声があちこちで聞こえる。昨夜からの雨で濡れた路面に朝陽が反射してキラキラ輝いている。その光線がカーテンを通して部屋の中まで差し込んでくる。

「まあ、いいお天気。久しぶりね。休日に晴れているなんて。嬉しい。あれっ?」

薫は、外を見てびっくり。洗濯物が干してない。日曜日であろうと、祭日であろうと、耀子の朝は変わらない。いつだって三百六十五日、朝は遅くとも五時に起きて食事の支度をしながら、洗濯機を回し、食事が終わると鼻歌を歌いながら洗濯物を干す。今日はないが、ごみ出しもいつも誰よりも早くゴミ置き場に置きに行く。

「まあ、言ってみればお母さんは丈夫なのだ」

しかるに、何と今日は何も干されてない。

「?」

そう言えば、戸を明ける音も、洗濯機を回す音も何もしない。

「?」

何の物音もしない。

「なっちゃん、あきちゃん、おばあちゃんを起こしてきて。」

「はあーい。」

パンを食べていた二人はいきなりパンを投げ出すと、先を争って階段を下りていく。

「おばあちゃん!」

どたばたの後に、二人の甲高い声がする。と、また階段をばたばた走って上ってきた二人が先を争って、薫に口をトンガラして我先にと報告する。

「おばあちゃん、寝てたよ。」

「うん、おばあちゃん、固かったよ。」

耀子の買ったロトシックスが、見事にびたりの数字を刻んで、差し込む朝陽の当たる財布の中で眠っていた。誰も気付かない。

「警告ブザー」

〒四九六―〇九二―

愛知県海部郡佐屋町西保森浦十七

みやおみあき 五十九才 教員

本名（宮尾美明）

愛知県立女子大学（現愛知県立大学）卒業

武蔵野美術短期大学終了

五十枚

耀子は、毎日毎日忙しい。自分で忙しくしている面は十分にあるが、忙しくしていないと置いて行かれるような、生真面目だけが取り柄という、単に昔の教えに忠実な普通の女性である。彼女が忙しい理由の一つに、世話好き、面倒見の良さもある。やらなくても良いような事にも、せっせと入れ込んで余計な仕事を増やしていく。簡単に言うと、仕事の整理が出来ないだけかもしれないが。

中学三年生の担任という忙しい立場もある上に、彼女はそんな気もなかったのにでっかい賞を受賞していつのまにか絵描きにもなってしまう、おまけにお節介も手伝って、文字通り身を粉にして働いてしまう。

夫の耕市も同じようなもので、二人はただ真面目なことだけが取り柄で、楽しいことや遊ぶこともすることなくただ真面目に働いてきた。多分に、遊ぶことが下手なだけかもしれないし、遊ぶことは罪悪だと自分に課して頑張り続ける世代のせいでもあったのかもしれない。

耀子はここ最近、非常に疲れていた。中学三年の年の暮れという超忙しくてストレスがたまる時期に、不可能というしかない絵の注文が入り、パニックになってしまふ。それでも、どんな不可能なことでも不可能と思うのは自分が怠けているのだと思えない頭の構造から、悲鳴をあげている体を酷使して、与えられた課題に猛進していく耀子。

したいこと、やりたいこと、欲しいもの、それらは定年後にとっておこうとばかりにフル回転の日々の中、目の血管が切れてついに体のあちこちにがたがくる。それでも走り続けようとする頭と、警告ブザーが鳴りっぱなしの肉体とその狭間で耀子のどこかが、何か完全に狂って狂ってしまう。

懐かしい母の面影、下りしかない奈落に落ちていきそうなエスカレーター、病んでいく肉体と精神は、彼女自身を切り裂いていく。

「敬告ロボザー」